



philosophy for children

こどものための哲学



The 3rd WORKSHOP of P4C Japan

9/2 2017

神戸大学附属中等教育学校

KP Room

## Workshop 時程

13:00-13:10 挨拶・趣旨説明 梶形公也 (大阪教育大学・武庫川女子大学名誉教授)

13:10-14:40 書評 1人30分 (議論含む)

①富田航佑 (愛知教育大学大学院)

②金澤正治 (西宮市立小学校)

③菱田伊駒 (石橋商店街タローパン/「アトリエ はちみつ堂」)

14:40-14:50 休憩

14:50-15:20 道徳の授業実践について 森本和夫 (枚方市立小学校)

15:20-16:00 質疑・議論

※まとめ文責：ツジムラ (p4c Japanスタッフ)

## Workshop Report



挨拶・趣旨説明 榊形公也

道徳の教科化を目前にした教育状況を踏まえ新著『子どもと倫理学』（フィリップ・キヤム著 榊形公也監訳 萌書房 以下『子ども - 』） - について言及。

- 道徳教育を「応用倫理学」と捉え、読む道徳から考える道徳へ -  
第3回ワークショップの趣旨説明がなされる。

### 書評

① 冨田航佑（愛知教育大学大学院） - 資料1参照

1「序」2「道徳的価値」3「倫理学を教えるためのガイド」4「教室での活動と練習問題を組み立てる」を抽出して要約。自身の考察を付加する形式で発表。

最後に疑問点として

・哲学対話では、教師と子どもたちは対等な関係で対話に参加するが、誤謬の指摘のときに子どもたちとの対等な関係が崩れはしないか。

・子どもたちの発言を黒板で記録すると本答には書かれていたが、教師が対話に参加せず黒板に書くべきなのか。

質疑応答：

○「対等な関係が崩れはしないか」という疑問に対し

・推論（『子ども - 』p.141）の①一般化 / ②対人論証 / ③わらん人形論に対し、対人論証やわらん人形論は教育現場で実践している。ただ、誤謬指摘を中心とはせず、誤謬に至った論理の背景を問う。

・「絶対に～である」という誤謬は、一般化。

・『ニコマコス倫理学』（アリストテレス）に拠っている。

TVのCMなどで「対人論証」は使われている。つまり、単純な誤謬推論で人を煽る。

・「問い」（問う？）だと「誤謬指摘」の時に対等性は崩れない。「授業」（レクチャー型）のスタイルが変わる。

○「教師が対話に参加せず黒板に書くべきなのか」

・オーストラリアでは模造紙を使いそれをめくっていく形式。



②金澤正治 (西宮市立小学校) -資料2参照



○第2章道徳的価値 [を身につけるため] の教育 (『子ども -』より抜粋)

以下2点を強調。

1 「～ことによって、不当な偏見に立ち向かうことができるようになる必要がある

あるのです。」 (『子ども -』 p.19) 2 「児童生徒がこのようなやり方に抵抗すること

ができるようになるのは、道徳教育が必要なのです。児童生徒は、有無を言わさない道徳

的規範の専制と個人主義的な道徳的相対主義の綻との間で自分の進むべき道を見つけるために道徳教育を必要と  
しているのです。(同p.22~23)

「日本の道徳教育(価値を教える)」に縛り付けられていた者にとっては新鮮である。(金澤)

○「無感覚をまとう。仮面をかぶる。」-高学年にはありがちな姿勢。(金澤)

○第4章倫理学を教えるためのガイド (『子ども -』より抜粋)

以下2点を強調し、

1 「適切な問い—主題の中心 届く問い—を する技術は実践を重ねることではしか磨かれません」

2 「それゆえ最も重要なことは、児童生徒が次のことに気づくことです。つまり、児童生徒の意見は倫理的探求に  
おいて共有される価値を重んじられること、しかもその理由は意見が正しいからでは必ずしもなく、考えるに値する  
からである」 (『子ども -』 p.75~85) を前提に光村図書道徳の教科書編集趣旨「道徳価値のよさに気づき~」(傍  
点ツジムラ)を批判。

○「第5章教室での活動と練習と練習問題を組み立てる」

授業で援用できる箇所として『子ども -』 p104~123を挙げる。特に「問いの四象限」

(p106) の援用可能性を紹介。

質疑応答：

「考えるに値する」と思うことは大切である。

イソップが駄目なのは何か?—伝えたい価値が明確なので「考えることの動機」を削  
いでしまう。



※まとめ文責：ツジムラ (p4c Japanスタッフ)

③菱田伊駒(石橋商店街タローパンー「アトリエ はちみつ堂」)

以下、菱田さん自らが自身のFacebookにされたものを要約/編集し転載します。



こんにちは。菱田伊駒といます。まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。梅田から電車で20分くらいの場所に石橋という駅があります。駅降りてすぐの石橋商店街の中にある、「タローパン」というパン屋で働いています。(中略)働きながら商店街の活性化活動に関わるようになり、その延長で石橋地域たちの子どもたちと一緒に、p4cの活動をしています。最初は月数回、近くのカフェを借りての取組でしたが、今は一軒家を借りて活動拠点とし、石橋にp4cのコミュニティができるよう奮闘しています。\*\*\*\*\*

書評をすることは8月上旬から分かっていたので、パラパラと本を眺めつつも発表内容が固まらないまま日々が過ぎていきました。先週くらいになって、いよいよまずいと思い始めたくらいから、この赤い表紙の本の存在、見た目の印象というか、触った感じ、寝る前にページをめくる時の感覚に変化が生まれてきました。それは、手に持ったときの重さ、重たくなっていったということです。本の厚みも前以上に大きく感じるようになりました。読み飛ばしていた一文一文に「ああそういう考え方があるのか」、あるいは「いや、自分はこうは考えないぞ」と思い始めたのです。丁寧に読みたいと思って内容をゆっくり追っていくと、同意、反論、疑問、共感、連想・・・そういうように、気持ちを動かされるようになっていったのです。本に対する愛着も湧くようになり、出かける時に読みもしないとわかっていながら、とりあえず鞆にいれて持ち運んでみて、妙な安心感を覚えたりもしました。



\*\*\*\*\*

そうしているうちに、ふと思いついたのが「ものを大切にすること」とはどういうことだろうか?ということでした。

「ものを大切にしてください」、自分の持ち物を丁寧に扱ってください。ランドセル、教科書、筆箱、鉛筆・・・こういうことは色々な場面で言われます。

しかし、「大切にすること」を、自分の思いのままに決められるのでしょうか。自分で大切にすることかしないかを決めて、実際にそのように行動する、というよりは、物に対して「勝手に」大切だなあ、という感覚が芽生えてきたのが実感です。

子どもについて考えてみるとどうでしょうか。こどもは「これこれを大切にしてください」と親や先生から言われてもなかなか聞きません。一方で「大切にしてください」と誰もいわないもの、カードゲームであったりゲームソフトや人形、場合に

※まとめ文責：ツジムラ (p4c Japanスタッフ)

よっては何の変哲もないタオルケットや石ころを熱心に丁寧にあつかったりします。「もういい加減すてなさい!」と、そこらへんでひろった葉っぱを捨てるよう子どもに向かって親がいらだつ場面も、容易に想像できます。

\* \* \* \* \*

こういうことを考えていると、「ものを大切にすること」というのはそんなに単純ではないような気がしてきます。そもそも、大切に「する」とはどういうことでしょうか? どうすれば、何かを「大切にすること」ができるのでしょうか?

文科省が出している資料「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳」の中に、学年別に指導の観点を整理してまとめたものが書かれています。19項目のうち、10項目目に「約束や決まりごとを守り、みんなが使うものを大切にすること」と書かれています。ぼくが本を通して出会った問いは、資料と重ね合わせるとまさに「道徳的な問い」と言えるかもしれません。しかし、小学1,2年生で指導すべき内容に、27歳のぼくは答えるどころか、問いに出会ったばかりでこれから考え、学んでいく途上なのです。このことについて、本に戻ってもう一度考えてみたいと思います。

\* \* \* \* \*

「こどもと倫理学」の1章、8ページに、幼児の道徳的体験の始まりについて書かれた箇所があります。このように書かれています。「初期の道徳体験は、子ども自身の数々な探究行動に由来するのです。わたしは、このことを強調したいと思います。(中略)子どもの道徳の学びは典型的には指導教授によるのではなく、子どもの行動と他者の応答の全体に由来するということを再認識させてくれます。また、こうした道徳の学び方は、幼児に特有なことではなく、生涯を通じて続きます。「幼児は自分自身で「こうしたい」と思って物を触る、人に対して働きかける。働きかけることによって生まれる他人との相互作用のなかで「こうすれば親に甘えることができる。こうすれば怒られる、褒められる」と知っていく、ということだと思います。ここで、ぼくが注目したいのは、「(幼児に特有なことではなく)、生涯を通じて続く」という部分です。ぼくたちは子どものときに比べると、他人との関わり方の作法を身につけています。先生であれば、身につけるだけでなくそれを「教える」立場にいる。しかし、実際はぼくたちもまた、道徳体験を積んでいる最中であり、学びつつある「探究者」である、ということです。

\* \* \* \* \*

道徳の学び方を考えるには、2章、30ページも参考になるかもしれません。ジェローム・ブルーナーの考えである「らせん状のカリキュラム」が紹介されています。

“基本的な事柄に対する子どもの直観的な理解から始まって、年月を重ねるにつれて、次第に洗練されたもっと抽象的ない

し形式的なレベルで、この同じ基本的な概念、テーマ、問題へ戻っていくという考えです。”

最後に、一番大切だと思うにも関わらず、考えきれなかったことについて触れておきます。探究の「コミュニティ」という考えです。カムは、「共に考える」ことをとても重視しています。「共に考える」ことの意味については、p4c 業書から出されている一冊目の本、『共に考える』で詳しく述べられているので、ご興味のあるかたは、そちらをご覧ください。

ここでは、考えることの「イメージ」について、『子どもと倫理学』の 86、87 ページ、また、監訳者の榊形先生があとがきでも触れている部分を引用するに留めます。

“考えるという、”「ロダンの考える人」のイメージのように、1人で、じっくりと考える、ということ思い浮かべる人が多い。しかし、共に議論するという思考のあり方は、ラファエロの「アテナイの学堂」のイメージである。”

さらに加えるなら、ラファエロの『アテナイの学堂』よりもっと素敵なイメージを加えたいと思います。それは、p4c japan の HP のトップにかかげられている、みんなで輪になって、大人も子どもも、服装も関係なく、コミュニティボールを囲んで話している様子を描いたイラストです。このイメージこそ、「共に考える」イメージにふさわしいと思って



います。という発表を受け、司会の中川氏が「ものを大切にすべきか」でもいいし、まったく別のことでもいいから各自お考えを

- と、全員にコミュニティボールを回す。



※まとめ文責：ツジムラ（p4c Japanスタッフ）

## 道徳の授業実践について

森本和夫 ( 枚方市立小学校 ) - 以下、ハンドアウトの抜粋にもとづき発表内容を説明



### 1 - 3 授業形態

- ・ 「道徳」の授業として行う。・ 道徳の副読本・ 教材を使用。・ ひとつのお話を2時間で行う。  
(1時間目...問いを立てる 2時間目...問いについて話し合う)

### 1 - 4 評価のしかた

- ・ 授業後、(自己)評価と感想を書いてもらう。
- ・ 評価は、今日の授業の雰囲気 深く考えたか 話が聴けたか の3観点。それを、A~Dで表してもらう。  
A...よい(できた) B...まあよい(まあできた)  
C...あまりよくない(あまりできてない) D...よくない(できてない)
- ・ 結果は、学級だよりとして、後日配布する。

理由も書かせる

### ※論点①

来年度から、道徳が教科化になる。評価は記述になる。子どもの感想文をストックしておけば、記述評価の参考になると思う。

この部分を強調して説明。

### 2 - 1 「はまっていることは何？」(1回目)

- ・ p4c 1回目の定番。一人ひとり、今はまっていること、興味、趣味などを語っていく。この時間だけは、道徳の教材を用いない。 ・ p4cに限らず、学級開きに最適。 ・ 本来は、毛糸を使ってコミュニティーボールを作っていくのだが、今年はクッションボールを使用した。
- ・ 全員が発表したら、評価と感想を書いてもらう。

評価の表 省略

○森本の感想

- ・ 子どもたちは同じ学年で6年目だが、意外と他の仲間のことを知らない。・ 自分のことを言うことが嫌な子もいる。
- ・ しかし、このような円になって活動することが今までなく、とても新鮮だったようだ。
- ・ 毎年、これをして

いるがいつも成功する。

話すのが苦手な子もいるのでそこでは気をつける。

3 - 1 「ここを走れば」 (光村図書) 1回目

- ・ いよいよ道徳教材を使う。
- ・ 1時間目は、物語を読み、その話の末に書いてある「問題(中心発問)」について感想を言ってもらおう。次に、その感想も含めた「この時間の問い」をみんなで立て、精査しながら、ひとつの問いにしぼっていく。

○話の要約

○教材にある問題

「ぼくは、お父さんがなみだを流していたのを見たとき、どんなことを思ったのだろう。」

○子どもたちの回答

省略

○ここから話し合いたいことは？

- ・ なぜ、お父さんは、路側帯を通らなかったのか？・ 路側帯を通っていたほうがよかったのでは？・ なぜ、おじいさんのいいつけを守って、規則を守ったのか？・ なぜ、おじいさんは倒れたのか？・ 用事があるときでも、法律をまもらなければいけないのか？・ おとうさんが、おじいさんのためにすべきだった行動は？・ あのと、路側帯を走っていたら、どうなっていたらだろうか？

○決まった問い

「お父さんがおじいさんのためにすべきだった行動は？」

3 - 2 「ここを走れば」 (光村図書) 2回目

- ・ 「お父さんがおじいさんのためにすべきだった行動は？」で p4c形式で話し合う。(問いを立てる1回目は通常形式)

## ○話し合いの内容

・ 最初は、ルール(法律)を守るべきか、守らなくていい時もあるので はないかという議論になる。・ 次に路側帯を通る以外にも死に目に会える方法があるのではないかと いう議論に変化。・ 最後に、本文中のお父さんのおじさんへの気持ちから、自立すること、大人になることの話、そして自分たちが親へ対しての気持ちなどの話になった。

## ○評価

表 省略

## ○その理由

・ 質問をし合えてよかった。・ ちょっかいをかけられて、深く考えられなかった。・ 今日の雰囲気がAの理由はいろいろな反論や意見を述べ合えたから。・ そわそわしていた。・ 深く考えながら、反論や意見を言っていたから。・ また、ちょっとさわがしかったから、笑ってたりしていた。・ 雰囲気は普通、そんなに深く考えていない、話は普通に聴けた。・ なかなか難しい疑問だったので、考えられなかった。・ だれかが、言い合ってるのを見て、その反論を考えたりしていたからA。・ 今日は友だちの意見に対する「反論」もあって、雰囲気がよかった。もう少し深く考えられたらよかったから、これからはもう少し深く考えようと思った。・

今日の雰囲気は、足で物音を立てたり、ボールを持っている人以外がしゃべったりしたから、Cにしました。深く考えたは、私は人の話を聞くばかりで発言しなかったのがBです。・ 男子3人がずっとこそこそ遊んでうるさくて、話があまり聴けなかった。友だちの意見で、なぜそうなるかを考えることができた。



## ○この授業を通して、あなたは何が変わりましたか？

・ 受ける前は、路側帯を走らなくて正解と思っていたけど、おじいさんのためだと考えてたら受けた後は路側帯を走れば良かった。・ 考えるといろいろ出てくる。・ 何もかわっていない。かわれそうもない。・ お父さんへの思い、感情。・ 今まで、話は正直聞き流していたけど、今日は、よく話をきいた。話をきちんと聞くことに変われそう。・ 前よりちょっと考え方が変わった。・ 非常のときすべきことを考える。・ ルールを守ったほうがいいなと思いました。

- ・ 始めは緊張して、でも、何歳になったら自立できるところで、勇気を持って言えたところが変わった。・ 親の言っていることが正しいときはしっかり聞こうと思った。・ 読んだ話に対する見方が変わった。それはないと思っていたことが、もしかしたらあるかも、という意見に変わった。・ この話のように、もしものことがあった場合、その人がいつも言っていたことを思い出しながら対応していきたいと思いました。
- ・ 自分の親にも急に何かあるかも知れないので、いつ、どこで、何があっても後悔しないように、毎日を楽しむことができるように変われると思う。・ 変われそうです。お父さんは、自分のお父さんで、世界で一人だけのお父さんなので、大切に、一緒に過ごす時間は無駄にしないで生活していきたいです (反抗期で、悪口ばかりなので)。

—線部を強調して説明。

○森本の感想

- ・ 文科省が求めている道徳的な内容の議論になったと思う。
- ・ 与えられた問題よりも、自分たちで立てた問いのほうが盛り上がる。
- ・ 何か、授業後に考えが変わったことが、教師としては何よりうれしい。
- ・ 内容が重いこともあって、近くの子と関係のない話をして  
いる子もいた。



※論点②

クラス全員が深く考える問いは可能なのか？

4 - 1 「当番活動」(日本文教出版)1回目

省略

発表時も省略

○森本の感想

今回は、土曜参観でp4cを行った。子どもたちもすぐ後ろに保護者がいるので、なかなか落ち着かない様子だったが、それなりに議論が続いたと思われる。p4c毎年1回以上は、参観日で公開している。保護者は不思議な授業をしているなという顔はするものの、これまで一度もクレーム的なものはない。ただ、「この授業良いですね」などの言葉ももらったことはないのだが...

※論点③

—線部を強調して説明。

保護者公開は、したほうが良い。

※論点④

時間があれば、同僚の教員への公開もしたほうが良い。

5 - 1 「青の洞門」 (東京書籍) 1回目

○話の要約 省略

○教材にある問題

「洞門が完成したあと、実之助が全てを忘れて了海の手をにぎったのはどうしてですか？」

○子どもたちの回答 省略

※おおよそ、副読本ねらいどおりの回答になります。

○ここから話し合ってみたいことは？

・ 実之助は本当に了海を許してよかったのか？・ 許してもらった了海の気持ち ・ 実之助は了海のどういうところを許してしまったのか。・ もし、自分が実之助なら了海を許すか？許せないか？・ 悪いことをしても、いいことをすればなぜ許されるのか？・ 了海は人殺しの犯罪者なのに、良いことをしたからといって許していいのか？・ 実之助に殺されていい覚悟があるのに死刑から逃げるのだろうか？・ 実之助が許しても、心の優しい了海はそれで納得するのだろうか？・ なぜ、彫るのをあきらめなかったのか。・ 人を殺しているのに今まで捕まらなかったのか？・ 了海を許して家族から怒られなかったのか？

○決まった問い

もし、自分が実之助なら、了海を許せるか？

5 - 1 「青の洞門」 (東京書籍) 2回目

もし、自分が実之助なら了海を許せるかで、p 4 c 形式で話し合う。

○話し合いの内容

最初、許せるか許せないかで話し合う。ほぼどちらかの意見になったが、森本が「自分の親が殺されたら許せる？」

という発問をすると、意見は、一気に許せないと言い出す。そこからは、議論は盛り上がり、「そんな偉大なことを

する人がそもそも殺人をするなんて矛盾している」「喜んで殺してくださいと言っている人を殺しても復讐したことにはならない」などと、本質をつくような意見が多くなる。さらに、「許せないなら、謝る必要なのか？」という議論へ展開する。すると、数人の児童が「謝っても殺された人が戻ってくるわけではないし、意味はない」と言い出す。それに対して「謝る必要がないなら、悪人は何をしてもいいのか？」と反論が出てくる。

話をもっと具体的にするために、森本が「例えば、大切にしている物を壊されたり、無くされたりしたとき、新しく同じ物を買ったら、償ったことになるのか？」という発問をする。すると、「例え新しく同じ物を買ったとしても元に戻るわけではない」「思い出は戻ってこない」という意見がある一方、「物は物であって思い出があるわけではない」「自分自身の心の中の問題など、話が続いた。

議論が深まり、終われないという雰囲気になる。

○評価 表省略(資料3参照)

○その理由

- ・ しっかり考えたし話も聴いたし雰囲気もよかったと思うから。・ みんな真剣に考えていた。・ 今日は、みんなで話合っている感じだったからAです。・ みんなが自分の意見や質問を言えていた。・ みんなの話が聴けた。
- ・ 話している人も少なかつたし、まあ、普通に考えられたし、普通に話げできた。・ やっぱりしゃべっている人がおつた。・ みんながしゃべっていた。・ 今日は結構静かだったけど、話している人の声が少し小さかつたので雰囲気はBです。・ 今回は、後半深くなりすぎて問いが頭に入らなかつた。・ あまり深く考えられなかつたからB
- ・ みんな注意したりしていた。・ みんなで反論を言い合えてよかつたから。
- ・ 途中からわからなくなつた。・ なぜ、深く考えたかという、みんなの考えが浅かつた。
- ・ 今日は、結構いい話合いになつたと思ひました。・ 上から見て左側の人が話していなかつた。・ 今日は、黒いのを持っている人以外はあまりしゃべらなかつたから。・ あまり意見を言えなかつた。・ 深く考えることができた。・ 雰囲気はなんか最初にうるさい人がいた。

という理由がでる

○この授業を通して何が変わりましたか。省略(資料3参照)

○森本の感想

議論は、反論がしっかりと出てくるようになり、深めることが出来つつある。しかし、口が達者な一部の子どもで、議論を回している感覚が否めない。発言者が固定化しつつあることはマイナス要因である。

## 論点⑤

道徳でp4cをする場合には、教科書を使うと元になる教材集めが難しくなると思われる。

## 6 論点の整理

①来年度から、道徳が教科化になる。評価は記述になる。子どもの感想文をストックしておけば、記述評価の参考になると思う。 ②クラス全員が深く考える問いは可能なのか？ ③保護者公開は、したほうが良い。 ④時間があれば、同僚の教員への公開もしたほうが良い。⑤教科書の著作権問題

題材になり得る「お話し」が少なすぎる。ソースが教科書のみとなったときに題材探しが難しい。

## 質疑・議論

論点③（「保護者公開は、したほうが良い。」）に対して

保護者からの具体的な反応は？→感想を書いてもらったものはあります。どういった活動をしているのかを説明する責任はある、学級通信では伝えきれないので、参観などで公開している。

道徳の時間を使うようになったのは？→3年前から道徳の時間を活用してきた。それまでは、思いつきで（決まった授業時間を使わずに）行っていた。次々にクラスの児童にスポットを当てることができるという効用もある。

以上

